

広島大学「グローバル教員養成プログラム」の現状と課題

－国際バカロレア教員養成システムの導入に向けて－

研究代表者 松見 法男（日本語教育学講座）
研究分担者 小野 章（英語教育学講座）
仁科 陽江（日本語教育学講座）
永田 良太（日本語教育学講座）
桑山 尚司（グローバル教育推進室）
Brett Walter（グローバル教育推進室）
Aaron Sponseller（グローバル教育推進室）
Micky Babalola（グローバル教育推進室）

I 研究の背景と目的

近年、グローバル化が進む現代社会において、教員には、子どもたちのグローバルマインドを育成できる資質や能力が求められており、従来的一条校に加え、インターナショナルスクールや国際バカロレア（International Baccalaureate）校で指導ができる教員の養成・確保が急務とされている。このような背景のもと、広島大学の教育学研究科及び教育学部では、2016年4月に「グローバル教員養成プログラム」を開設した。広島大学の伝統的な教員養成を土台としつつ、新たに国際バカロレア教師養成システムを一つのツールとして取り入れ、次世代の教育を担える教員を養成する計画である。本研究は、この計画の遂行を支える基礎研究であり、具体的には次の2つの課題を行う。

- (1) 「グローバル教員養成プログラム」の複数の科目について、その内容と課題を分析する。
- (2) 国際バカロレア教育に従事している教員にインタビューし、日本の学校教育と国際バカロレア教育との比較を行う。

本研究の成果は、広島大学のグローバル教員養成がどのような方向に進むべきかについて重要な示唆を与えてくれる。また、本プログラムの広島大学モデルの構築にも寄与すると考えられる。

(松見法男*)

II グローバル教員養成特定プログラム（学士課程）授業科目の内容と課題

1. 教育に関わる英語の語彙・表現力の育成

「グローバル教員養成特定プログラム」（学士課程）では、インターナショナルスクールや国際バカロレア校で教育活動を行う上で必要な英語の語彙・表現力を培うため、1年次に「教育の英語基本用語Ⅰ・Ⅱ」という科目を設けている。受講生は、「教育の英語基本用語Ⅰ」では1,500語の、「教育の英語基本用語Ⅱ」では1,600語の、合計3,100語の教育に関わる英語単語をオンライン形式で学習することになる。平成29年度の受講生は、「教育の英語基本用語Ⅰ」が教育学部11コースの57名であり、「教育の英語基本用語Ⅱ」が教育学部9コースの38名であった。様々なコースの学生が受講していることから、教育に

関する英語の語彙力を身に付ける必要性が認識されていることが分かる。

いずれの科目においても、受講生はオンラインの学習システムにより各自のペースで学習を進め、中間試験と期末試験によって理解度が測られることになる。試験の結果を見ると、いずれの試験においても受講生は高い成績を修めており、教育に関する英語基本用語の1年次における習得が期待できる。

ただし、授業期間を通して継続的な学習が行われているかどうかについては、課題が残る。学習システムには学習記録が残され、授業担当者は受講生の学習状況を確認できるようになっている。オンライン学習の記録を見ると、継続的に学習を行っている受講生がいる一方で、試験前に集中的に学習を行っている受講生も多く見られる。学習した語彙の定着という観点に立つと、継続的な学習が求められるが、それをどのように具現化するかを考えることが今後の課題となる。

1年次には教育に関する英語の基本語彙を学習するが、2年次においては表現や文レベルでの学習を行うために、「教科書の英語表現Ⅰ・Ⅱ」という科目が設けられている。「教科書の英語表現Ⅰ」では、教科書や授業に関わる英語表現についてオンラインで学習を行う。「教育の英語基本用語Ⅰ・Ⅱ」とは異なり、提示された表現を覚えるだけでなく、当該表現を用いた文を受講生自身が作成することにより、実際の教育場面での使用に繋げることをねらいとしている。

「教科書の英語表現Ⅱ」では、国際バカロレア校で使用されている『Theory of Knowledge』の中から、受講生自身が今後の教育活動にとって重要だと考える文を抜き出して対訳ファイルを作成する。中間試験と期末試験では、受講生が作成した文に基づいて、個別に試験問題が作成される。このように、2年次における授業では、受講生自身の能動的で主体的な学びにより、教科書における英語表現や文レベルの学習が行われる。平成29年度の受講生は、「教科書の英語表現Ⅰ」、「教科書の英語表現Ⅱ」ともに、教育学部6コースの27名であり、全員が1年次の「教育の英語基本用語Ⅰ・Ⅱ」から継続して受講している。この点で、教育に関わる英語について、語彙レベル、表現レベル、文レベルと発展的に習得することが出来ていると言える。ただし、「教育の英語基本用語Ⅰ・Ⅱ」と同様に、「教科書の英語表現Ⅰ・Ⅱ」においても、いかに継続的な学習を行わせ、定着を図るかが検討課題として残されている。

(永田良太*・仁科陽江*)

2. アメリカ・ミシガン州立大学への留学プログラム

(1) 留学プログラムの内容と現状

広島大学大学院教育学研究科は、平成28年6月14日に、ミシガン州立大学英語センター(The English Language Center at Michigan State University)と部局間協定を結び、広島大学の学生がミシガン州立大学(以下、MSUとする)に約3.5ヶ月間の留学を行う「広島大学プログラム」をスタートさせた。平成28年8月24日～12月8日には5名の教育学部生が、また平成29年8月23日～12月7日には3名の教育学部生が、それぞれ留学して帰国している。以下では、本プログラムの内容と現状について、履修、授業、生活の順に記述する。

本プログラムの履修(留学)時期は、8月末～12月初めであり、広島大学における夏季

休暇と第3タームにあたる。学生は第4タームの開始直後に帰国するため、広島大学で開講される授業に出席できないのは第3タームのみである。その第3タームの授業についても、MSUでの各授業科目における取得単位が広島大学で開講される5つの授業科目の単位として認定されようになっており、本プログラムによる留学が履修単位の上で不利益にならないよう工夫されている。

MSUでの授業は、英語力の向上に主眼を置いたものと、広島大学での専門性を考慮した教育学に関するものとに大別される。後者では、指導法や評価について特定の教科に偏ることなく学んだり、地域の小学校、中学校、高等学校を訪問したりする。両者を併せて約300時間分の授業量となる。

留学生活は、大学での授業とMSU内にある学生寮（2名1部屋）での生活が基本となる。広島大学の学生については、日本人どうしが同じ部屋に配置されないように工夫されており、授業外においても英語の運用能力や他の文化圏の学生とのコミュニケーション能力を磨く場が設けられている。食費については、留学開始時に一括前払いの制度があり、キャンパス内に点在する食堂で、さまざまな食材を好きなだけ摂ることができるため、健康への心配は全くないと言える。

以上のような内容で、MSUでの滞在費は約10,000ドルである（授業料、寮費、食費を全て含む）。為替相場を1ドル=110円とし、渡航費を20万円とすると、3.5ヶ月間の留学費用の総額は約130万円であり、かなりリーズナブルである。ただし、そのような状況でも、これまでの留学実績が2年間で計8名に留まっているのは、経済的な理由が最も大きいと感じざるを得ない（留学に関心を示した学生とのやり取りに基づく印象である）。広島大学として、留学中の第3タームにあたる授業料を不徴収とする学費制度の整備が望まれる。また今後は、教育学部以外の学生への、特に教育や教員養成に興味・関心のある学生への、留学参加を促す方法を検討したい。

（2）学生の反応

本プログラムの留学を終えて帰国した学生に対し、授業・生活等に関する自由記述形式のアンケートを実施した。その中から改善点を挙げると、次の2点になる。

1点目は、広島大学プログラムに、他大学の留学プログラムの利点を取り入れることである。たとえば、法政大学の学生を対象とした留学プログラムには、休日ホームステイ制度と学生サポーター制度があり、これらの長所を採用することが考えられる。

2点目は、MSUでの授業単位の振り替えに関することである。MSUでの振り替え対象科目が、広島大学では「グローバル教員養成特定プログラム」受講者向けの講義・演習になっており、特定プログラムを受講しない学生がMSUに留学した場合、単位の振り替え制度を利用することができない。この点を改善する必要があるだろう。

（3）グローバル教員養成・国際バカロレア教育との関わり

MSUでの履修単位は、広島大学で第3タームに開講される5つの授業科目の単位に認定される。そのうちの3つの授業が、「グローバル教員養成特定プログラム」に対応したものである。これは、本留学プログラムがグローバル教員養成及び国際バカロレア教育と密接な関連することを示すものである。また、2017年度に留学した3名の学生のうち2名は、「グローバル教員養成特定プログラム」の授業である「IS教科書基礎研究（英語）」を留学前の第1タームに広島大学で受講し、優秀な成績を修めている。同授業は、国際バカロ

レアで使用される教材を基に、国際バカロレア教育の理念や方法を学ぶことを主たる目的としている。第1タームでの国際バカロレア教育に関する授業内容が大きな刺激となり、これら2名の学生は第3タームの時期を中心とするMSUへの留学を決意したようである。これら2名は帰国後も、海外への研修留学や国際バカロレア教育活動への興味・関心を高めており、本留学プログラムがグローバル教員養成や国際バカロレア教育と有機的に結びついている可能性が示唆される。

(小野 章*・桑山尚司*)

3. Class Analysis of “Education in Japan and Around the World” : A Course Developed for IB Certification

This report will analyze the class offered through the Global-Minded Teacher Training Program called “Education in Japan and Around the World.” As this course is designed with prospective International Baccalaureate (IB) certification in mind, this analysis will be conducted focusing on the regulations and requirements of courses in that program. This analysis will mainly focus on the following questions: How did the students learn in the class; what kinds of reactions have students given to the class; what issues need to be resolved so that the class could be more effective in the view-point of the requirements of IB education?

The purpose of this class is to introduce students to a comparative study of education around the world. Students in this class learn not only about how education around the world is comparable to that of Japan but also about specific issues related to contemporary education, international education, development. This includes a descriptive study of regional based education, with one or more lesson focusing on selected countries.

The class is taught in a completely student-centered leaning manner, requiring students to take turns researching and presenting about a country’s educational system of their choice. Students then also lead a discussion on their chosen country and are assessed on their overall performance. Guest speakers are invited to share their knowledge of the educational system in their home country and their experiences of what school was like for them. The guest speaker’s presentation is the centerpiece of each lesson, as it provides students with firsthand information, the opportunity to ask questions, and helps reduce some of the negative perceptions that may exist about the education system in these other countries. Students are also given time to reflect on the country discussed that day and share their thoughts with their classmates while the teachers facilitate the discussion.

Students have reacted generally positively to the format and content of the class, but they have had some difficulty with the class as well. Most of negative feedback received from students comes during the first few lessons of the course, as the students are not often accustomed to a student-centered approach to teaching. Once the students become accustomed to this type of instruction, however, they often participate lively with guest presentations and come prepared for class discussions. By the end of the course, student feedback seems to designate that not only did they enjoy the lessons and the class, but would also prefer if more of their classes were taught in a similar manner.

According to the IB *Programme standards and practices* found on the International

Baccalaureate Degree Program website, certain requirements for teachers and classes have been identified for any school hoping to implement their own IB program. These requirements for teaching and learning include the need to engage students as inquirers and thinkers, to build on what students know and can do, to promote the understanding and practice of academic honesty, to support students to become actively responsible for their own learning, and to use a range and variety of strategies, to name only a few. The class as described above fulfills most of these requirements, as the course is taught mainly through discussion over lecture, with the inclusion of comparisons to student's own learning experiences, the requirement for students to present based on their personal research, and the use of guest speakers for a variety of teaching styles.

(Micky Babalola* · Brett Walter* · Aaron Sponseller*)

Ⅲ グローバル教員養成プログラム（大学院課程）授業科目の内容と課題

1. Class Analysis of “Principles and Methods of Instruction” : A Course Developed for IB Certification

This report will analyze the class offered through the Global-Minded Teacher Training Program called “Principles and Methods of Instruction.” As this course is designed with prospective International Baccalaureate (IB) certification in mind, this analysis will be conducted focusing on the regulations and requirements of courses in that program. This analysis will mainly focus on the following questions: How did the students learn in the class; what kinds of reactions have students given to the class; what issues need to be resolved so that the class could be more effective in the view-point of the requirements of IB education?

When developing the class, the instructors decided to focus their lessons on a student-centered approach. As the topic of the class broadly covers many aspects of instruction, students in this class learn not only about theories behind teaching (focusing specifically on direct, indirect, student centered, and peer teaching), but also about specific methods of instruction and assessment (such as the development of assessments, the use of modern teaching aids, and lesson planning) and about teacher roles outside of the classroom (focusing on student psychological issues, professional responsibilities, and community involvement). Each of these general areas is taught in a different manner by different instructors, providing students with a chance to experience a range and variety of strategies.

For example, the theory section of the class is taught in a nearly completely student-centered manner, requiring students to take turns researching and presenting about one specific theory of education of their choice. Students then also lead a discussion on their chosen theory and are assessed on their overall performance. The teacher roles outside of the classroom is similarly taught, but without the presentation aspect. Students are simply given materials to come to class prepared to discuss and the teacher leads the discussion on the topic. For the section on methods of instruction and assessment, the class takes another turn as students are not lectured as much, but are shown different methods of instruction then expected to incorporate this into the development of their own lesson activities, assessments, and eventually their own unit plan, a capstone project for the course which serves as their final assessment. These lessons are taught in a manner similar to a

workshop at a conference.

Students have reacted generally positively to the format and content of the class, but they have had some difficulty with the class as well. The majority of negative feedback received from students comes during the first few lessons of the course, as the students are not often accustomed to a student-centered approach to teaching and are often taken aback at the instructor insistence that they actively participate in their own education. Once the students become accustomed to this type of instruction, however, they are often lively with activities and come prepared for class discussions. By the end of the course, student feedback seems to designate that not only did they enjoy the lessons and the class as a whole, but would also prefer if more of their classes were taught in a similar manner.

According to the *IB Programme standards and practices* found on the International Baccalaureate Degree Program website, certain requirements for teachers and classes have been identified for any school hoping to implement their own IB program. These requirements for teaching and learning include the need to engage students as inquirers and thinkers, to build on what students know and can do, to promote the understanding and practice of academic honesty, to support students to become actively responsible for their own learning, and to use a range and variety of strategies, to name only a few. The class as described above fulfills the majority of these requirements, as the course is taught mainly through discussion over lecture, with the inclusion of references to previous learning, the requirement for students to present on one theory based on their personal research, and the use of discussions, presentations, activity development, and the occasional lecture. There are still, however, some issues that need to be considered in order to fully align this class with the requirements set by the IB Programme.

One issue is with the requirement to promote academic honesty, as there are few defined consequences for students who fail to follow the class academic honesty policy. Further, as the class is taught separately from other education classes that students are taking outside of the university, it is difficult for the instructors to tell if students are resubmitting work previously submitted in these other classes. A second issue is in reference to the requirement to incorporate a range of resources, including information technologies for students. Although one lesson in this class does introduce students to a variety of teaching methods they can implement that utilize technology in the classroom, due to the lack of access to a variety of technological tools (tablets, smart/promethean boards, certain smart phone applications, etc.) limits the potential for full student interaction.

(Brett Walter* · Micky Babalola* · Aaron Sponseller*)

IV 国際バカロレア教育と日本の学校教育との比較

日本国内の国際バカロレア校で活躍している若手教員にインタビューを行った。その結果の主要点を述べながら、両者を比較し、広島大学におけるグローバル教員養成プログラムのあり方を検討したい。

国際バカロレア（スイスに本部がある国際教育プログラムの提供組織）は、初等教育プログラム（Primary Years Programme）、中等教育プログラム（Middle Years Programme）、

高等教育プログラム（Diploma Programme）、キャリア関連プログラム（Career-Related Programme）の4つを通して、より良い平和な世界の実現を目指している。今回、インタビューの対象者として協力いただいたA先生は、国内のインターナショナルスクールに併設されている国際バカロレア校で、初等教育プログラムの実践に携わる教員である。インタビューの結果から見えてきた重要な点は、次の2つである。

第1点は、保護者の視点、考え方である。初等教育プログラムを受ける子ども達の保護者には、国際バカロレアの使命や教育の理念を明確に理解している保護者がいる反面、実用的な面から、子どもに英語の運用能力を身につけさせることを主眼とし、高い学費を負担している保護者が存在する。子どもが近い将来、英語圏を中心とする海外の学校で教育を受けられるように、幼児期・児童期から本格的な英語教育を受けさせたいという考えに基づく就学事例が一定数あると推測される。

第2点は、知識を豊かにする機会の保証である。子どもたちの中には、国際バカロレア校を下校した後、私塾に通う児童が少なくないという。初等教育プログラムは、本来、教科の枠を超えた探究学習を中心に、学習者像とスキル、知識を身につけ、積極的に行動できるように働きかけるプログラムである。通常の日本の小学校で展開されるような授業場面での知識獲得は、このプログラムの主旨ではない。しかし、日本の小学校で実施されるテスト（その延長線上にある中学校受験時のテスト）で高い得点を得るためには、教科書レベルの基礎・応用事項を相当量、覚える必要がある。国際バカロレア校ではそのような時間を確保することが難しく、それを補うために私塾に通う子どもたちが存在する。

これら2点を踏まえるならば、これからの日本の教育においては、学習指導要領に基づいた教育に加えて、国際バカロレア教育を一つの選択肢として利用できるような就学システムが理想的であると言える。

文部科学省のWebサイトにもあるように、「国際的な視野を持った人材を育成するため」、国際バカロレア教育のプログラムが導入される時代が、日本にも来ていることは確かである。ただし、教員養成の観点に立つと、「国際的な視野を持った人材」とは一体どのような人材なのかを議論することが大切である。少なくとも、「国際的な視野を持った人材」イコール「英語ができる人材」ではないことを、共通認識として持つ必要がある。英語を用いて授業ができる先生の存在は貴重である。しかし、日本の多くの子どもたちは、日本語を母語として成長・発達する。他者とのコミュニケーションツールとして、日本語の他に英語をはじめとする外国語を使用することはあっても、自らの思考、特に論理的・批判的思考は、日本語を用いて行うことが多い。教師は、子どもたちがそれを複数の視点から確実に実行できるようにサポートしなければならない。教師自らが、論理的・批判的思考を支える言語能力、認知能力を向上させ、専門領域に関する知識・スキルを、まずは母語でしっかりと教授でき、その上で外国語でも教授できる能力を身につけることが求められる。そして、問題解決のプロセスと到達点が必ずしも一つとは限らないという認識をもって課題に取り組むことが重要である。さらに、自分独自の視点とともに、他者の視点にも立てる思考が必要である。広島大学のグローバル教員養成プログラムが目指すべき方向性は、そのような能力の基礎を身につけて卒業・修了できる学生を育てることである。

（松見法男*）

V おわりに：知識とは何か

インタビューに協力してくださったA先生の体験談を紹介して、本稿をまとめたい。A先生がインターナショナルスクールで教育活動を始めてまもなく、国際バカロレア初等教育プログラムの2年生の子どもが、「先生、世界には大陸が幾つあるでしょう？」と質問を投げかけてきた。A先生はしばらく考えた後、「5つ」と答えた。その子どもは、「半分、正解！」と言い、さらに「『今は、5つ』と答えないと駄目だよ。」と返してきたという。

筆者が国際バカロレア教育に関連するシンポジウムやセミナーに出席すると、必ずと言って良いほど、「知識」あるいは「あなたが知っていること」の扱い方が強調される。知識には、時間的、空間的な変動性があり、極論を言えば、永遠不滅の「正しい知識」など存在しないという。これは、グローバル教員養成プログラムの受講生だけでなく、これから先生を目指す全ての学生に持っておいて欲しいと願う考え方である。知識には変動性があるがゆえに、人間はあらゆる分野、領域において研究を続け、最新の成果を世に出していかなければならないとも言える。

(松見法男*)

引用文献

文部科学省 Web サイト 『1. 国際バカロレアとは』 <http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/ib/1307998.htm> (2018年1月参照)